精神保健看護学の実践・教育現場で活用できる「渡辺式家族アセスメント／支援モデル」

○磯野　洋一[1)]、堤　　真紀[2)]、岡本　史彦[2)]
1）金城学院大学　看護学部　看護学科、2）訪問看護ステーションみのり

精神保健看護分野における援助者の役割は、対象者やその家族との人間関係の形成などにおいて非常に重要です。しかし、援助者が直面する人間関係等に関する支援に行き詰まった際には、問題の本質が見え難くなることも少なくありません。このような状況において、援助者はどのようにして援助方策を見いだし、どのように人間関係を再構築していくべきかが大きな課題となります。その解決の一助となるのが、「渡辺式家族アセスメント／支援モデル」（以下、「渡辺式」）です。「渡辺式」は、援助者が対象者およびその家族との関わりにおいて、困難な場面や時期に直面した際に、その背後で何が起こっていたのか、ことの全容を明らかにし、支援方策を導き出すための思考過程をモデル化したものです。「渡辺式」の特徴として、援助に行き詰まりを感じた場面や時期を特定し、援助者自身をも、分析対象とし、個々の理解から援助者と対象者、または家族成員との関係性そのものへと視野を広げるところにあります。このアプローチにより、援助者自身の理解から一歩進んで、支援対象者との関係性全体を視野に入れた支援が可能になります。具体的には１困難に感じた検討場面を特定化する。２援助者・対象者（患者等）・家族成員個々のストーリーを具体化する。３援助者・対象者（患者等）・家族成員それぞれの二者関係の相互作用を具体化する。４それぞれの情緒的パワーバランスと心理的距離を検討する。５上記４までの検討の結果、支援の方策を抽出します。これにより、単なる個別の問題解決にとどまらず、困難に感じた人間関係全体を俯瞰した支援が可能となり、より効果的な介入が実現します。本ワークショップでは、前半で「渡辺式」の概要とその実施方法について解説し、具体的な活用事例として、「臨地の現場（精神科訪問看護）」「看護基礎教育現場（精神科看護学）」での実践例を紹介します。これらの実践例を通じて、「渡辺式」のアプローチがどのように各々の現場で活用され、援助者・対象者・家族成員の関係をどのように改善するのかを具体的に理解していただきます。後半では、参加者の皆様に実際に「渡辺式」を使用した事例検討の一部を体験していただきます。模擬事例を基に、対象者の理解を深めるための思考方法を実践することで、「渡辺式」が実際の支援にどのように役立つのかを体感していただきます。また、事例の分析を通じて、援助者が持つべき視野の広さやアプローチの多様性を再認識していただけるのではないでしょうか。本ワークショップに参加することで、精神看護の臨地現場における援助の質を向上させるためのヒントを得ることができるでしょう。また、「渡辺式」を通じて、支援者自身の思考過程や関係性の重要性を見直すことで、看護基礎教育での教育や現場における現任教育においても、今後の支援に対するアプローチの幅が広がることを期待しています。